

草加市の観光と地域経済

▼ 2か所に集中する観光名所

せんべいの町として、また日光街道第2の宿場町として知られる草加市の観光資源は、市内を縦断する東武伊勢崎線草加駅東口と松原団地駅東口に集中している。草加駅東口ゾーンには、松寿山不動院東福寺をはじめとする寺社や明治末期から残る浅古家の民家、宿場町の名残を伝える道標などの史跡があり、松原団地駅東口ゾーンは、綾瀬川に沿って整備した延長約1.5キロの草加松原遊歩道に観光資源が点在している。観光名所が集中しているため、草加を観光する上ではお年寄りらにとっても楽なコースで、日帰り観光にはちょうど良い距離感だ。草加松原遊歩道を南に向かってそぞろ歩きをしながら、遊歩道が途切れた先の草加6丁目橋を渡って草加駅東口ゾーンに至るというルート、あるいはその逆の草加駅東口ゾーンを回遊しながら草加6丁



百代橋から見た草加松原遊歩道

目橋を目指すのも好き好きだが、観光客の姿を見ていると多くは、遊歩道を抜けて草加駅に抜けるコースを選んでいる。

その草加松原遊歩道は、日本の道百選にも選ばれている散歩道で、江戸時代から『草加松原』あるいは『千本松原』と呼ばれ、うっそうとした緑のトンネルを形成して日光街道の名所となっていた。松並木が県道足立・越

草加市の主な観光資源

〈草加駅東口エリア〉

- **東福寺**…草加宿の祖とされる大川図書（おおかわすしよ）が創建したと伝えられる松寿山不動院東福寺。本堂、山門、鐘楼（しょうろう）とも江戸後期の建造物。山門と鐘楼は市の指定文化財に指定されている。境内には東都落語の祖、石井宗叔と其月庵社中の歌碑、大川図書の墓碑などがある。
- **浅古正三家**…明治末期に完成した建物で、日光街道に面して母屋が建てられている。建物の規模は比較的大きく、広い敷地内の梅の木は市で保存中であり、建物全体が市の保存景観賞を受賞している。
- **八幡神社**…草加町見聞史によると、享保年間（1716-36年）に稲荷社を祀ったのが始まりで、安永6年（1772年）に木造の八幡神像を同社に併せて祀ったことから現在の神社名となったと伝えられている。
- **神明宮**…草加町見聞史によると、江戸時代の初めに宅地内の天然石を神体として祭ったのが始まりで、正徳3年（1713年）に草加9村の希望で宿の総鎮守として現在の地に移されたと言われている。
- **おせん公園**…神明宮の東側にある広場で、煎餅に見立てた自然石の「草加せんべい発祥の地」碑が建てられている。その隣には煎餅を焼く時に使用する火箸に見立てられた石も建っている。

- **おせん茶屋公園**…旧日光街道に面し、近世宿場を漂わせる公園。かつては草加町役場などがあった場所で、建設省（現・国土交通省）の手づくり郷土賞にも選ばれている。旅の記念に詠んだ俳句を投函できる投句箱が設置されている。（写真下）



- **住吉とやま公園**…歴史散策路の中ほどにある小公園。歴史散策路は、草加駅前一番通り商店会の通りから歴史民俗資料館、神明あじさい公園、東福寺参道を経て旧道に至る700メートルの区間で、賑わいと活力を町に取り戻そうと整備が進められている。
- **歴史民俗資料館**…1983年（昭和58年）に建築された県内初の鉄筋コンクリート造りの草加小学校西校舎を改修してオープン。2つの展示室と2つの収蔵庫、多目的ルームがある。土器、煎餅の製造具、民俗資料など郷土の歴史資料約1,600点が収蔵され、そのうち約150点が常設展示されている。昨年、国の登録文化財に指定された。

谷線に沿っていたことから、市では1982年(昭和57年)に松並木を保護するため、上り車線を西側に移設する工事を完了させ、85年から『埼玉シンボルロード整備計画』に基づいて遊歩道を整備した。現在、遊歩道には石畳が敷かれ県道をまたぐ百代橋や矢立橋の歩道橋も架けられ、約600本の松が往時の面影を伝えている。

▼遊歩道内に多くの資源

東京外環自動車道を背に、南に向かって遊歩道を歩き始めると水原秋桜子の句碑や松尾芭蕉の文学碑があり、太鼓橋型の百代橋や矢立橋が東西を結ぶ道路上に掛けられている。百代橋は86年に、矢立橋は94年に建設されたもので、その名の由来は松尾芭蕉の『奥の細道』から引用したという。百代橋の隣にある松原大橋を渡ると伝統産業展示室があり、せ

んべいや浴衣、皮革を展示しているほか販売も行っている。また、矢立橋の最上部から見る松並木は最高の場所で、一度立ち止まり背後を振り向かなければ見逃してしまう。

矢立橋を超えると五角形の望楼があり、一帯は公園になっている。多くの観光客がここで一服、昼食時には弁当を広げる姿も見られ、



草加松原遊歩道の北端を示すモニュメント

〈松原団地駅東口エリア（草加松原遊歩道）〉

- **草加松原遊歩道**…草加6丁目橋付近から旭町1丁目南端までの1.5キロの区間。旧日光街道沿いに600本を超える松が植えられている。江戸時代から「千本松原」と呼ばれ、街道の名所となっていた場所。綾瀬川沿いに石畳の遊歩道が伸び、観光資源が多数点在している。
- **札場河岸**…綾瀬川舟運の船着き場で、所有していた家の屋号が「札場」であったことから、そう呼ばれている。船荷の揚げ下ろし場（河岸）の石段が復元され、当時の雰囲気再現している。(写真下)



- **甚左衛門堰**…1894年(明治27年)から約90年間使用された二連アーチ型のレンガ造り水門。建設当初の姿を保ち、保存状態も極めて良好で埼玉県指定文化財。河岸遺跡と共存するレンガ造り水門としては県内唯一のもの。
- **望楼**…石垣上に建っている埼玉県産の杉とヒノキを使用した木造五角形の建物。午前9時から午後5時まで自由に展望台に登れ、草加市内や松並木を一望できる。
- **松尾芭蕉像**…奥の細道旅立ち300年を記念して建立された。像は南方の千住方面を見返している。友人や門弟たちとの別れを惜しむかのような姿。
- **矢立橋**…1994年(平成6年)に建設された草加松原遊歩道に二つある太鼓型の遊歩道の一つ。長さ約100メートル、幅約4メートルあり、橋の名は奥の細道にある「行く春や鳥啼き魚の目は涙 これを矢立の初めとして…」にちなんで名付けられた。
- **百代橋**…1986年(昭和61年)に建設された草加松原遊歩道にある太鼓橋。橋名は奥の細道にある「月日は百代の過客にして…」にちなんで名付けた。和風のデザインを基調に、付近の景観や歴史性を考慮している。
- **芭蕉・河合曾良壁画像**…草加松原遊歩道の北端、東京外環自動車道の下をくぐった左側の壁面に描かれた縦2.4メートル、横4.0メートルの絵タイル。河合曾良は、奥の細道で芭蕉に随行した芭蕉の門下生。

出所：今様・草加宿ガイドマップ

休憩する場所としては最適。その広場には綾瀬川の舟運で運ばれてきた荷を揚げ下ろす『札場河岸』が復元され、当時をしのばせている。『札場河岸』の札場は、この舟着場を所有していた家の屋号で、その反対側には1894年（明治27年）から約90年間使われた二練アーチ型のレンガ造水門『甚左衛門堰』が今も残っている。埼玉県の指定文化財で、河岸の遺跡と共存するレンガ造水門としては県内唯一という。この草加松原遊歩道には建造物だけではなく、しだれ桜や芝桜、つつじ、赤彼岸花、白彼岸花が植えられ、花の見所にもなっている。

▼草加駅東口ゾーンは宿場町

公園の先は伝右川が流れ、松原団地駅東口ゾーンと草加駅東口ゾーンを隔てる草加6丁目橋がある。この橋を渡ると旧日光街道の旧道を中心に多くの文化史跡が点在し、草加宿の名残を今にとどめている。草加宿は、1630年（寛永7年）に千住宿に次ぐ2番目の宿として誕生したが、1つの村で宿を編成できるほどの大きな集落がなかった。そこで、近辺の村を合わせて宿組を編成して宿を形成したと伝えられ、当初の規模は戸数84軒、旅籠屋6軒のほか豆腐屋や団子屋、餅屋などの商家が軒を連ねる程度で、ほとんどは農家。しかし、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅で草加を歩いた1689年（元禄2年）ごろになると、戸数は120軒ほどに増えて草加宿の総鎮守として神明宮が建てられ、急速に近郷の商圈として発展していく。

草加駅東口ゾーンには、その神明宮をはじめ松寿山不動院東福寺や八幡神社、回向院などの寺社が多く、中でも東福寺は草加宿を開発した大川図書が創建したと伝えられ、江戸後期に建てられた本堂や山門、鐘楼が今も残っている。寺社だけでなく江戸時代から残る

浅古氏の古民家や、明治初期の町屋建築として市の保存景観となっている藤城家の建物も貴重な観光資源だ。このほか、神明あじさい公園やおせん茶屋公園などの休憩所もあり、おせん茶屋公園では旅の記念に詠んだ俳句を投函できる投句箱も設置されている。

▼観光を支えるのは市民

草加市の観光を支えている資源としては、新旧の建造物だけでなく『草加ふささら祭り』や『宿場まつり』も貴重な観光資源として活用されている。こうした草加市の観光を支えているのが市民で、中でも2007年にスタートした『草加宿案内人の会』は、草加を訪れた観光客のために見所を紹介してくれる。事前に予約すればボランティアのメンバーが無料で草加市の観光スポットを紹介、昨年は1年間で約1,000人の観光客を案内した。案内人の会に限らず、市民総出で立ち上げたのが『今様・草加宿』市民推進会議だ。これまでの市による街づくりを市民の視点から見直すことを提案、行政との協働を基本に草加市全体を魅力的で個性的な街にするために活動している。

この市民推進会議はもともと2003年（平成15年）に、旧日光街道南側から綾瀬川の松並木までの地域を一つの都市再生軸『今様・草加宿』の街づくりを考える組織として実行委員会が設立されたのが始まり。実行委員会には対象地域内の町会や自治会、商店会、商工会議所などの役員と公募委員で組織され、草加宿の再生と復活を目指して様々な街づくり活動を展開してきた。その代表的な成果が『今様・草加宿再生ビジョン』の策定で、2005年に草加市長に提言している。市民推進会議は実行委員会を前身とした組織で、昨年5月に発足、これまでの『今様・草加宿事業』について検証しながら、観光を含めた草加市全域



札幌河岸から眺めた矢立橋

の街づくりを調査研究し提言することになっている。

▼行政も積極的に観光推進

市民ベースでの観光振興だけでなく、行政も積極的に魅力のある観光を推進しているが、そのベースになっているのが2003年に策定した『産業振興ビジョン』だ。この振興ビジョンの中で観光推進事業や観光資源 PR 事業、環境整備事業の3事業を体系化。観光推進事業では、市外からの観光客を誘致して地域経済を振興させるため、観光協会が中心となって関係団体と連携して各種事業を展開するとの将来像を示している。また、桜並木撮影会や朝顔市、草加さわやかさんコンテスト、草加の四季観光写真コンクール、草加宿七福神めぐりなどを充実させ、同時に観光客に名所を分かりやすく包括的に案内できる『草加再発見』事業を推進することも産業振興ビジョンでは描いている。観光資源 PR 事業では、様々なイベントを行いながら観光資源を創出するとともに、貴重な資源の保全を図っていくと提案。環境整備事業の中では誘導板の設置や電柱の地中化、ガードレールの素材を見直し観光資源 PR 事業と連動しながら環境整備を充実させることを目指している。

この産業振興ビジョンをベースに市当局は

観光振興政策を進めているが、すでに市内各随所で成果を見ることができている。例えば、観光には休憩場所がつきものだが、ただ単に休憩する場所を設置するのではなく、『おせん茶屋公園』や『札幌河岸公園』など特色のある休憩所を設けてきた。『おせん茶屋公園』では、休みながら旅の記念に詠んだ俳句を投函できる箱があり、『札幌河岸公園』は史跡を見ながら昼食をとれる広場となっている。今後は、市内に古くから残る民家があり、市ではこれらの民家を借り上げて市民団体に貸し出し、休憩所として活用していく計画だ。市産業振興課商業観光係によると、「市内には旧家が6-7か所ある。そのうちの1か所を建物の保存という観点から借り上げて、休憩所を兼ねながら観光資源にできれば」と話し、2010年度からの実施を目指している。さらに、観光客が市内を迷うことなく歩けるように、各所に道標を設置しているが、これも環境整備事業の一環。道標は2009年9月までに草加・松原遊歩道や草加駅東口の市街地を中心に24基が設置されたが、今年3月末には草加駅と松原団地駅前、札幌河岸公園内にそれぞれ総合案内板が設置された。

▼東武鉄道とタイアップ集客

草加市は有数の観光地とは決して言えない



休憩場所に最適な札幌河岸公園



県内初の鉄筋コンクリート造の草加小学校西校舎。
現在は歴史民俗資料館として活用されている

が、市民や行政が一体となって観光振興を推し進めていることから、入込客数は徐々に増えつつあるという。観光スポット別の正確なデータはないが、市が県に報告している入込観光客数によると、祭りや観光イベント、体育館利用などを合わせると2003年（平成15年）に約71万3,200人だったのが2008年には約84万2,600人に増加した。2009年は現在集計中だが、さらに増加が見込まれ、85万人の大台を突破することも視野に入っている。というのは毎年、東武鉄道が企画している『東武健康ハイキング』のコースに、昨年6月に初めて草加市のコースを追加。当日には4,000人を超す参加があり、全22回のハイキングコースではその時点で最大の集客となり、東武鉄道の関係者を驚かせたという。これほど多くのハイカーが訪れたのは「多分に草加市が都心部に近く、お年寄りも気軽に参加できるちょうど良いコース設定だったことも影響しているのではないかと商業観光係では話し、新たな観光資源に加わったとみている。

着実に入込客数を伸ばす背景には、まだ多くの要因がある。観光資源が乏しい中で、資源をいかに発掘するかを市民や行政が真剣に取り組んでいるからで、せんべい焼きの体験やB級グルメ的な食材の提案といった資源

開発が着々と成果を上げてきた。手焼きせんべいは草加松原団地ゾーンの中にある伝統産業展示室で体験でき、同じ伝統産業である皮革のレザークラフトの教室も開いている。B級グルメ的な食材では、小松菜を材料にサツマモ入りの『小松菜マフィン』や『マーボ小松菜パイ』など6メニューが昨年11月に行われた草加ふささら祭りの『草加名物レシピコンテストで』で入選。今後、草加市を訪れた観光客や市民に広めていくことにしている。こうした新たな観光資源開発が入込客数の増加に寄与していくことは確かだ。

▼地域経済への寄与に期待

草加市の観光資源がどれほどの規模で地域経済に寄与しているかは不明だが、少なくとも年間80万人以上の入込客数がある以上、かなりの効果をもたらされていると思われる。市内にはお土産物の代表格であるせんべいを販売する物販店や飲食店が多数あり、草加市観光協会が製作、市が発行するガイドマップに分かりやすく掲載している。観光客1人が仮に買い物や飲食で1,000円を支出したとすれば、約8億円以上の経済効果がすでに創出されているわけで、入込客数の増加とともに支出単価を引き上げる努力を官民一体で推し進めれば、目に見える経済波及効果をもたらされるだろう。

幸い、観光振興では今様・草加宿市民推進会議や草加宿案内人の会など、市民レベルの活動が充実しており、市当局も観光推進に積極的であることから地域経済への寄与度を高めることは容易と思われる。ただ、入込客数や経済効果の目標などを明確に示して、市民と行政が一致団結していくことが望まれる。